

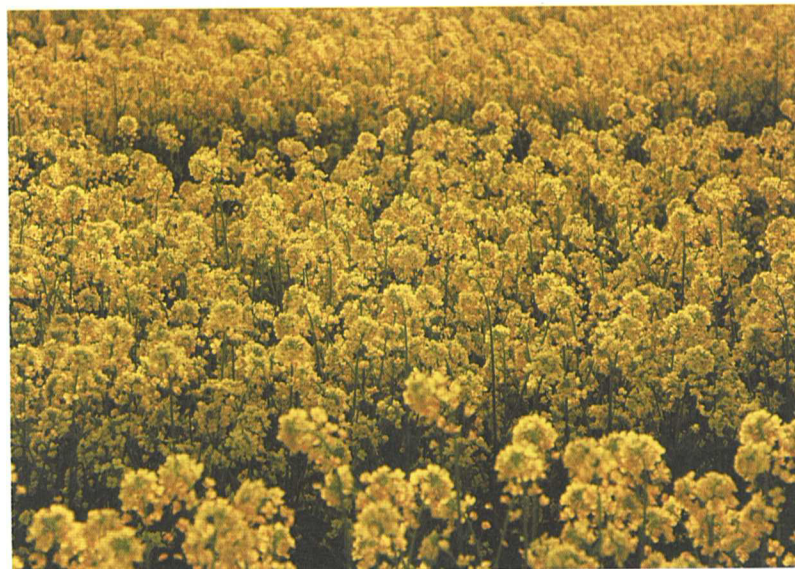
神と共に歩む人生
ヴァルヘルム・ブッシュ
(8回連載、第5回)



第五章 罪を負ったままで、 人生を生き通せるか

この章のテーマは「罪の重荷」です。このテーマこそ、もっと真剣に、私たちが考えなければならぬ問題です。罪と、それによって生じる神への負い目、呵責、債務、わかりやすく言えば「罪の重荷」は、意識しようとしまいと、神を信じない人々につきまとい離れることはありません。

この章で、人生を幸せに豊かにしてくださる神の大きな贈り物についてお伝えできるのは、私の大きな喜びです。その神の贈り物は地上のどこにもなく、どんなにたくさんのお金を払っても買えません。またそれは、誰かに頼んで手に入れることができるようなものでもありません。その神の贈り物とは、「罪の赦し」です。恐らく多くの方々は「え、何かと思ったら『罪の赦し』だって？」と、がっかりされたのではないのでしょうか。



どうして私に「罪の赦し」が 必要なのか

「罪の赦し？ そんなものはいらないね」。多くの方々はそう思われるでしょう。最近、ある若者が私に面白いことを言いました。「僕たちは広告に踊らされて生きているんだよ。おじいさんやおばあさんたちは、きっと有名なガムやお菓子の名前なんか知らなかったと思う。でも僕たちの時代には、テレビやラジオの宣伝で『このガムやお菓子がないと絶対ダメだ』って思い込まれているんだ。大会社の宣伝で『自分にはこれが必要だ』と思い込まされて、人々はいらない物を買わされているんだよ」。そしてその若者は、続けて私にこう言ったのです。「教会もこれと同じじゃないの。『あなたたちには罪の赦しが必要です』なんて言って、何かを売りつけようとしているんでしょう。本当は、僕たちにはそんなものまったくいらぬのに、必要みたいに思わせようとしているだけじゃないんですか？」

ある時、私は道を歩いている人を呼び留めて、「こんにちば。あなたのお名前は？」と尋ねました。「マイヤーだけど？」。そこで私が「マイヤーさん、あなたには『罪の赦し』が必要ですね」と言うと、彼は答えました。「ばかばかしい。私に今必要なのは『罪の赦し』なんかじゃない。二千マルクだよ」

しかし本当に、私は聖書の言葉を、何の必要もないのに宣伝して無理強いしているのでしょうか。それはまったくの誤解です。あなたがどのようにお考えかは知りませんが、この「罪の赦し」ほど、私たちが必要としているものは他にないのです。

「罪の赦し」などいらない、という人は、至高にして恐るべき神の存在を知らないのです。神については、その愛の側面だけがよく語られ過ぎたせいで、神が一方では聖書に書いてある通り、真に恐れるべ

きお方であることがよく知られていないのです。私自身、罪の人生から目覚めた時、それまでおざりにしていた「神に対する恐れ」を持つ必要を痛感したのです。

「罪の赦し」などいらないという人は、生ける神が、あなたの身も心も、罪を償うために永遠にゲヘナ（地獄）に投げ込むことができるお方である、ということを知らないのです。もし世界中のすべての人がその恐ろしさを知らず、また信じようとしなければ、私たち人間は一人残らず失われてしまうのです。イエス様は、人が失われていくことに対して、はつきりと警告しておられます。私たちは自分自身の罪を抱えていながら、「罪の赦し」などいらない、などと平気で言える存在ではありません。「罪の赦し」ほど必要なものは他にないのです。

その昔、私は美しいチューリッヒの町で講演会を開きました。会場は満員で、大勢の人々が壁ぎわに

立っていました。その中に、楽しそうに話し合っている二人の男性がおりました。おそらく彼らは好奇心から参加していたのでしょう。私が話し始めると二人とも興味深そうに聞き入っていました。そして私が「罪の赦し」という言葉を初めて口にした時、

片方の人がもう一人に囁（ささや）きかけました。彼らが何を言ったのかは遠くて聞こえませんでした。が、その様子で何を言っているか、すぐにわかりました。「あーあ、『罪の赦し』だってさ。また、牧師さんのいつもの話だぜ」。そして「僕は別に犯罪者ではないんだから、『罪の赦し』なんかいらないよ」とでも言っていたのでしょう。

そこで私は付け加えました。「今から三十秒のうちに、私の質問に『はい』か『いいえ』かのどちらかで答えてください。あなたはこれから永遠に、『罪の赦し』を拒否し続けますか?」。およそ千人からの参加者は、三十秒間、沈黙しました。そしてそ

の時、先ほどの二人の男性も非常に驚き、困惑した表情を見せたのです。

私たちはいわゆる犯罪者ではありませんが、死を目前にした時には、やはり神に「罪の赦し」を乞うのではないでしょうか。私たちはいつまでも「罪の赦し」を拒否し続けることができるでしょうか。あなたご自身はいかがですか。

「私は正しい。だから誰も、何も怖くなんかない」という人がいます。しかし、十歳以下の子どももの口からはそのような言葉は出てきません。人間は子ども時から、すでにいろいろな罪の呵責を負っているのです。ですから「私は正しい」などと口にできるのは、もはやその人の心に良心らしい良心がなくなっていることを暴露しているのです。言い換えれば、その人の中では良心が衰えて、心の動脈硬化が始まっているのです。もしも良心が健全であれば、私たちには「罪の赦し」が必要だ、ということがはっ

きりとわかるはずです。

何年か前のことですが、エッセンという町で、ビル・ヘイリーというロックンロール歌手がバンドを連れてきてコンサートを開いたことがあります。そこに集まった数千人の若者たちは、最初は静かに音楽を聞いていたのですが、次第に興奮して荒れ狂い、皆でその会場を壊し始めたのです。それは実にひどい壊し方で、損害は甚大でした。その大荒れのコンサート翌日、私が町を歩いていると、いかにも前の晩にそのコンサートに参加したと思われる若者と出会いました。私は彼に話しかけて、どうして会場を壊したのか、その理由を尋ねてみました。すると彼は言いました。「ああ、あれ?みんな、絶望し切っているのさ」。「一体、何に絶望しているの?」と聞きますと、「いや、実はそれが俺たちにもよくわからないんだ」

デンマークの偉大な神学者であり哲学者であるキエ

ルケゴールは、自伝の中でこう語っています。ある日父親と一緒に散歩した時、父親は急に立ち止まって彼を上げしげと見つめ、言いました。「そうか。お前は静かな絶望の中で生きているんだな」と。それを讀んだ時、私は四十年間牧師をしている者として、「この表現不可能な虚無感、絶望感は、誰もが持っている」と思いました。

この問題を、あなたにもお聞きしたいのです。あなたはこのような絶望をご自分の人生で体験したことがありますか。あるとすれば、その絶望感が一体どこから出てきたのか、私たち自身の心の中を探る旅に出かけましょう。

私はかつて鉱山で牧師をしていた時、よく坑道に下りていきました。作業着を着てヘルメットをかぶり、心細い昇降機で深い坑道へと下りていくのです。最下層は水が溜まっているので、通常、昇降機は手前の階までしか行きません。でも一度だけ昇降機の

鋼索が切れて、最下層の水溜まりに転落したことがあります。恐ろしい体験でした。その時以来、私は、「鉱山の最下層には汚れた水が溜まっている。その汚水は、人の心の最深部に淀んでいるものと同じではないか」と思うようになりました。

私たちの心の奥には、何層もの深い坑道が錯綜しているのではないのでしょうか。たとえば見かけは喜んでいても、心の奥はまったく違った思いが占めている、表面は笑っていても本心は死ぬほど辛い、というようなことがあります。外面上問題がなく辛せで、人生を謳歌しているように見える人々でも、実は心の奥底では絶望にうめいている、ということがあり得るのです。心理学者や精神科医はこのようなことを経験でよく知っています。

そして、心の奥底にある絶望感と恐怖心は、時には心の表面にまで上がってきます。ある精神科医が話してくれたのですが、今、どこの診療所も大勢の

若者たちで溢（あふ）れています。その若者たちは

絶望感や恐怖心がどこからきているのかをよく知ろうとしないで、ただそれらが取り除かれることだけを期待します。その方法は薬物療法です。精神科を訪れるのはまだいいほうで、中には安易に麻薬に手を出す若者も多いのです。薬物や麻薬によって簡単に忘れることができると考えより、問題に真正面から向き合って、何が不安で、何が絶望の源なのかをしつかりと見定めた方が賢明だと思いませんか。

人の心の最深部に深い絶望が巣食っている、ということは、精神医学の分野で最近問題にされ始めたそうです。しかし聖書はすでに三千年前に次のように言っています。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。

(エレミヤ 17:9)

人が持つ陰険な心について、その由来を、聖書は次のように説いています。「人は神に罪を犯してからというもの、神から遠く離れ、人間の本来あるべき姿からも離れて生きている。しかし、人は生ける神の裁きに対して心の底で大きな恐れを抱いている。だから私たちにはどうしても神が必要なのです」と。私たちの心が絶望に打ちひしがれる最大の理由は、神に対して持つ負い目、罪の呵責にあります。これこそが私たちの人生で最大の問題であり、自分自身ではどうにもできない問題です。私たちはそれに気づいているので深い絶望感を持つのです。罪の赦し、罪の負い目からの解放は人にはどうしても必要です。それは自明のことであり、何にも増して重要なことです。

ところで、罪とは何を意味しているのでしょうか。ひとことで言うと、「罪は神から離れている一切のこと」です。ですから、私たちは生まれた時からす

でに罪人なのです。

例をあげましょう。戦時中にイギリスで生まれた子どもたちは、ドイツ人に対して何の敵意も抱いていたわけではありません。でも、ともかく彼らは「敵の国に生まれた」のです。つまり、「この世」という神に敵対する場所で生まれた私たちは、生まれた時からすでに神から遠い存在として生を受けたのです。そして生まれた後、自分の周囲に罪の負い目の壁石を一つ、また一つと積み上げることによって、さらに神から離れた者になっていきます。その壁石はやがて城壁となり、罪は取り返しつかない現実となつてそびえていきます。

罪から離れることがいかに難しいものであるかを、私が初めて実感した時のことをお話します。私と父とはとても仲がよかったのです。ある日、私が屋根裏で試験勉強をしていた時、階下から父が私を呼びました。「町に出かけるから、いっしょに行かない

か」。ところが試験勉強に夢中だった私は、この誘いを断つてしまいました。その二週間後、父は急死しました。父の遺体がわが家に戻ってきて、息子たちが傍に付き添いました。静かな夜で、皆は眠りについていました。私は父の傍にいて、二週間前に父の誘いを断つたことを思い出していました。私は父に語りかけました。「お父さん、もう一度、僕を誘つてよ。したらどんなに遠くても、お父さんが行きたい所に喜んでついていくから」。ちよつとした愛の欠如が永遠に取り返しつかない結果となることを、私は骨身にしみて知らされました。それは、永遠に解決されない父親に対する罪の負い目となったのです。

あなたは人生の中で、意識する罪の負い目、意識しない罪の負い目がどれくらいあるか、考えてみたことがありでしょうか。積み重ねてきた罪、愛の欠如による怠慢、わがまま、悪癖。それらに取り囲

まれて私たちはどのように生きていけばいいのでしょうか。そうです。「罪の赦し」がなければ、私たちはこの人生を生きていくことはできないのです。

次に、死について考えてみましょう。「死ぬ時とは、いったいどのようなものだろう」と、私は何回も想像しました。死ぬ時、愛する人の手を握ることができるかもしれません。しかしその手も、いつかは離さなければならない瞬間がやってくるのです。

その時、私は完全な静寂の中を、自分の人生を背負つて神の御前に進み出ていきます。すべての罪の負い目を携えて、聖なる神の御前に立つために。その時、すべての罪の負い目を負つて立っていることの重みに気がついて、私たちは畏怖と驚愕の思いに圧倒されるのではないのでしょうか。私たちには「罪の赦し」が必要です。それは日々の糧よりも、はるかに必要なものではないでしょうか。



罪の赦しはどのようにあるのか

過去を清算する方法があるのでしょうか。あるとすればどのような方法でしょうか。私は先ほど父と町へ買い物に行かなかった思い出をお話ししましたが、その時の後悔は消えることはありません。私が自分自身の努力によって心の負い目を取り消すことは不可能なのです。このように、心の負い目、罪の負い目は神の前に残るのです。

聖書には、ユダという男が主イエス様を銀貨三十枚で裏切ったことが書いてあります。しかし彼は突然、自分が間違ったことをした、と気づいて後悔します。

そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、「私は罪を犯した。罪のない人の血

を売ったりして。」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ。」と言った。

(マタイ 27:3-4)

あなたが誰かに向かつて「自分の罪を取り消したい」と言っても、戻ってくる答えは同じようなものでしょう。私たちの罪が清算され、なかったものとされる方法はあるのでしょうか。もしそれが可能だとすれば、一体どこにそのような「罪の赦し」があるのでしょうか。

聖書はこのことに明快な解答を与えています。旧約、新約の全巻を通して聖書が明言しているのは、「罪の赦し」があるということです。

ここで私といっしょにエルサレムの門をくぐり、ゴルゴタの丘のふもとに行ってみようではありませんか。民衆を見るのではなく、また十字架につけられた二人の犯罪人を見るのではなく、周りにいるロー

マ兵を見るのでもなく、中央の十字架につけられたその方に目を向けてください。その方こそ、神のひとり子イエス・キリストです。ある時、イエス様は民衆に対し「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか」(ヨハネ 8:46)と尋ねられました。しかし、それに答えて罪を責めることのできる者は一人もいませんでした。私たちの中でこのような質問のできる人、つまり自分に罪のない人は、誰一人としていないのです。

その後、イエス様は捕えられ、ローマの総督、ユダヤの祭司長、議会の高官たちの取り調べを受けました。しかしイエス様には何の罪も見いだすことができませんでした。イエス様は私たちと違って「罪の赦し」をまったく必要としない存在、神のひとり子だったのです。しかし今、イエス様はゴルゴタの丘で十字架にかけられました。

イエス様は、人の姿をとってはいますが人間で

はありません。この世とは違う世界、つまり神の世界から私たちのところに降りてこられた方です。その神の御子であるイエス様が十字架にかけられたのです。いったいなぜ、どうしてでしょうか。神は常に正しいお方ですから、世の罪を罰せずに見過ごすことはなさいません。ですから、私たちの罪をご自分の御子イエス様に負わせて十字架にかけられ、その犠牲によって私たちの罪を消し去ろうとなさいました。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

(イザヤ 53:5)

これこそ聖書の偉大なるメッセージです。神の裁きはイエス様に向けられました。そのおかげで私たちに平安が与えられたのです。ここに「罪の赦し」

があるのです。私の罪の負い目はどこに行けば取り去ることができるのでしょうか。どこに行けば神との和解が得られるのでしょうか。その答えがここにあるのです。「イエス様の十字架のもと」です。神の御子であるイエス・キリストの血潮によって、私たちのすべての罪が清められ、赦されるのです。どうかこの神のよき知らせを、あなたが感謝とともに受け取ることができますように。

アメリカ人のウイリアム・ベル・ハルという牧師が興味深い本を出しています。この方は、大戦中に数百万人のユダヤ人を殺したアドルフ・アイヒマンが刑務所に拘留されていた時、十三回も彼のもとを訪ね、長時間にわたり話をした牧師です。彼はアイヒマンが処刑され、地中海に遺灰が撒(ま)かれるまで見届けました。彼は死を目前にしたアイヒマンの最後の言葉を聞いており、彼との対話を一冊の本にまとめて公表しています。本の題名は「魂のため

の闘い」です。彼は次のように報告しています。「私にとって大事なことは、この恐ろしい罪人が地獄に落とされるのを救うことでした。この男は何百万人もの人間を殺し、世界中に悲惨と恐怖を撒き散らしましたが、さらに恐ろしいことに、最後の瞬間まで彼はこう言っていたのです。『私のために死んでくれる人など、私は必要としない。私は罪の赦しなどまったく欲しくない』と」

あなたはアイヒマンと同じように、罪を抱いたまま死にたいと思われませんか。まさかそうではないでしょう。それなら、どうか心から神の御子であるイエス様のところに立ち返ってください。イエス・キリストお一人だけが、私たちの罪を赦すことができます。なぜなら彼は私たちの罪を赦すために死んでくださって、私たちの罪の負い目、神に対する債務を、すべて支払ってくださいったからです。

ハル牧師はアイヒマンと対話中、この凶悪な犯

罪者にイエス様の血潮による「罪の赦し」を提供することを、空恐ろしく思ったこともありました。このような人が「罪の赦し」を受けることなど、ありうるのでしょうか。そうです。神の御子イエス・キリストの血潮は、それがどんな罪であろうとも、それを清めることができますのです。しかしそのためにはまず自分の罪を認め、それを告白し、そして十字架を見上げなければなりません。そして次のように言えばいいのです。「私のために、イエス様は尊い血を流し、いのちを捨て、私を罪から贖い出してくださいました。そのことを、私は信じ、受け入れます」と。

聖書は、十字架につけられ死んでよみがえられた主イエス様が、どのようにして罪を赦すことができるのかを明快に示しています。イエス様は十字架で死なれたままではなく、三日目によみがえり、今も生きておられます。聖書のある箇所は、

イエス様を「保証人」に見立てています。保証人とは、ある人が借りたものを返せない場合にその人に代わって債務を支払ってくれる人です。私たちが人生で犯す一つ一つの罪は、すべて神の前に支払わなければならない債務となります。「罪から来る報酬は死です」(ローマ 6・23)と聖書は言っています。私たちが犯した罪に対する報酬として、神は私たちに永遠の死を要求されます。

それゆえに、イエス様が地上に來られ、私たちの罪の身代わりとして死んでくださったのです。そのお陰で私たちはいのちを得たのです。イエス様は神の御前で私たちの債務の保証人となってくださいます。私たちは、自分の罪の負い目を、苛酷な地獄で身をもって永遠に支払い続けるか、あるいはイエス様のもとに行き、イエス様の贖いのみわざによって、罪を清められ、罪赦され、解放されるかのどちらかです。ですからどうか、主イエス様を信じ、あなた

のための罪の赦しを受け入れてください。

エルンスト・ゴットフリープ・ヴォルターズドルフ氏はある歌の中で次のように歌っています。「私たちのために一人の保証人が来られました。その方は私の罪の負い目を負い、私あての請求書を代わりに受け取ってください、その全額を完済してくださいなのです」。このことを聖書のある箇所は、当時の奴隷の売買のたとえで語っています。ある人が奴隷として売られていく場合、自分自身で代価を払って自分を買うことはできません。そこへ親切な人が現れてその奴隷の代金を払い、奴隷を解放してくれました。

ところで、この幸福な奴隷はいつから自由の身になったのでしょうか。もちろんすべての金額が支払われた時からです。同じように主イエス様は、あなたのためにゴルゴタの丘でそのすべての罪の代価を支払ってくださいました。それもご自分の血によっ

て。そして自由にされたあなたは、奇跡的に次のように言うことができるようになったのです。「主イエス様、私は自分の罪を包み隠さずあなたの御前に差し出したので、あなたはその罪の代価のすべてを支払ってくださいました。私はそのことを信じます」と。イエス様はあなたの罪の代価を、身代わりとなって払ってくださいました。イエス様はあなたを罪から解放してくださいました。

フィリップ・フリードリッヒ・ヒラーという詩人は、次のように歌っています。「罪は赦された。罪の赦しはあなたが生きていくための神の贈り物であり、苦しみ悩むたましいのためのイエス様がくださる新しいいのちだ」。聖書はまた、このことを「神との和解」という言葉で表わしています。この世の多くの宗教には、それぞれが崇める偶像に「動物のいけにえ」を捧げるならわしがあります。しかし、天地の創造主であるまことの神は、ただ一つの「犠

牲」だけを認めておられます。それが世の罪を取り除く神の小羊、イエス様です。イエス様だけが十字架にかかって人類の罪の身代わりとなり、神との和解をもたらした唯一のお方です。しかもその罪の贖いのみわざは、ただの一度で完了したのです。

アルベルト・クナツプ氏は次のように歌いました。「イエス様は永遠に私の目の前に立っておられる。犠牲の小羊として黙って血潮を流し、青ざめた御顔で十字架につかれたイエス様。そのお方が、この私のことも覚えていてくださる。『完了した』と十字架の上で叫ばれたその時も」

また聖書は「洗い清める」という意味の言葉も使っています。「イエス様は私たちを愛し、その血潮によつて私たちの罪を洗い清めてくださいました」というように。

聖書にある放蕩息子の話をご存知でしょうか。放蕩息子は放蕩の限りを尽くし、ついには豚の世話をして

するまでに落ちぶれました。その結果、彼は自分自身の罪に目覚め、ありのままの姿で家に、父親のもとに帰っていきました。彼は家に帰る前に自分自身を洗い清め、清潔な洋服を着たわけではありません。汚れ果てた無残な状態で帰り着いたのです。その彼を父親が洗い、新しい衣を着せてくれました。多くの人々は、キリスト者になる前に、信仰を持つ前に、まず、良い人間にならなければならないと思い込んでいるようですが、とんでもない誤解です。私たちは、汚いままの自然な状態でイエス様のところに行けばいいのです。そして、たとえどのように汚れた人生だったとしても、そのままイエス様のところに行きさえすれば、イエス様ご自身が洗い清めて、すべてを新しくしてくださいます。

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(1ヨハネ 1:7)

これはヨハネの言葉です。そして私たちも、同じことを告白することが許されているのです。

「罪の赦し」について、聖書はそれ以外にもいろいろの言葉を用いて語っています。あなたもぜひ、これらの言葉に注意して聖書を読むことをお勧めします。そしてこの「罪の赦し」というイエス様の贈り物の驚くべき祝福と恵みを、あなたが感謝して受け取れますようにと願っています。

罪の負い目を担ったままで、どうしたら私たちは人生を生き抜くことができるでしょうか。その答えは、一日も早くイエス様を見いだし、イエス様を通して罪の赦しを体験的に知る事です。そうすれば、深い不安や絶望感は消え去ります。イエス様に自身自身の罪の負い目を委ねることは決して怖いことではなく、不安で暗い地下室から、神の恵みに満ちた光の中に移されることを意味します。あなたご自身にもそのようなことが起こるようにと心から願って

います。

ここまでごいっしょに見てきた重要なことを、簡単にまとめておきましょう。私たちは「罪の赦しを必要としている」のでしょうか。はい、必要としています。では、一体どこに行けば「罪の赦しを手に入れる」ことができるのでしょうか。その答えは、十字架につき、いのちを捨て、私たちの罪の犠牲となり、私たちを罪から贖い、三日ののちによみがえられた「救い主イエス様」のところです。人は、そこに行きさえすればいいのです。



どうすればイエス様のところに行けるのか

ここまで読んで次のように考える方は、神のすぐ近くにおられます。「罪の赦し」が得られるとは何とすばらしいことだろう。しかしそのために、私は一体何をすればいいのか」と。「罪の赦し」にたどりつく道は、町で売られている本には書いてありません。大学でも教えていません。「罪の赦し」にたどりつく手助けは人間にはできません。あなたご自身が静まってイエス様を呼び求めることです。よみがえられたイエス様は今も生きておられます。聖書では信仰に導かれた人々のことを「イエス様の御名を呼び求めた人々」と言っています。

あなたも、静まって、主イエス様の御名を呼び求めてください。「呼び求める」のは、何もむずかしいことはありません。「電話をする」と同じ

じです。イエス様への電話は誰にも開かれています。あなたはそれを、長い間使ったことがないかもしれませんが。どうぞ、今すぐに電話をしてみてください。電話番号を知らないって？ご心配なく。ただ「主イエス様」とだけ言えばいいのです。そうすれば電話の向こうで、イエス様が待ち構えていてくださいます。

では、電話がつながった後、何をイエス様に話せばいいのでしょうか。あなたの心の中にあることすべてを、そのまま、正直に話せばいいのです。たとえば、「主イエス様、私はある人と暗やみの関係を持っています。罪であると知っていても、自分の力では離れられません。主イエス様、どうか助けてください」。あるいは、「主イエス様、私が自分の仕事で申告した税金がここ何年も正しくありません。私は自分が不正を行っていると知っていますですが、破産に追い込まれるのが怖いのです。どうか助けて

ください」と。あるいは、「主イエス様、私は妻に對して誠実になれませんが、自分ではどうすることもできません。助けてください」と。あなたの呼びかけは、そのまま「祈り」になります。心のおもむくままに、神に祈るのです。

このようにイエス様とお話ができることは素晴らしいことです。あなたは他人には言えないことをすべてイエス様に打ち明けることができるのです。イエス様は確実に聞いてくださいます。どうか心に解ることを洗いざらい打ち明けてください。それは解放となります。どうかあなたの罪、負い目のすべてをイエス様に明け渡し、そして尋ねてみてください。「主イエス様、この本の著者はあなたの血潮によってすべてが解決されると言っていますが、それは真実なのでしょうか」と。

どうか今すぐにでもイエス様を呼び求めてください。そして長い間使われていなかった回線でイエス

様と話をしてみてください。イエス様とはいつでもお話しすることができます。そして主イエス様の御名を呼び求める者の一人になってください。

お話しした後であなたは、「すべてをイエス様に打ち明けたのに、イエス様は何も答えてくれない」と言うかも知れません。イエス様のお答えの回線がどこにあるかわからなければ、いくらイエス様があなたに語りかけられても、あなたの耳には聞こえません。そこで次に、イエス様がどのような回線を使ってあなたに語りかけられるのかをお話しします。

まず新約聖書を手に取ってみてください。旧約聖書は少し難しいので、まず新約聖書の「ヨハネの福音書」を読んでみてください。そして続いて「ルカの福音書」へと進みます。身近な本を手にするように気軽に読み進めてください。そんな風にして読んでいるうちに、イエス様ご自身があなたに語りかけ

てくださっている、ということに気がつくのではないのでしょうか。

聖書が他の本と違うのは、生きておられる神が、直接私たちに個人的に語りかけてくださるというところにあります。ある人が私にこんなことを言いました。「私は神の御声を聞くために、森の中に行くのです」と。そこで私はこう答えました。「森の中に行けば、木々が風にそよぎ、小鳥はさえずり、小川のせせらぎが耳に入ってきて、さぞ気持ちいいことでしょう。しかし、私の罪はどのようにして赦されたか、どのような新しいのちが私の中に流れているか、神がどのような素晴らしい恵みを与えてくださっているかについては、森は決して答えてくれません。それらについては、神は聖書を通してのみ、私に語りかけてくださるのです」

毎日十五分で結構ですから、静かなひとときを持ち、主イエス様を呼び求め、すべてを打ち明けてみ

てください。たとえば、「イエス様、私は大きな問題をたくさん抱えて、一人ではやっていくことができません」とか、何でもいいのです。あなたの思いをすべてイエス様に打ち明けてください。それから「主イエス様、今度はあなたが私に語ってください」という思いで聖書を開き、一章でも、その半分でも読んでみると、あなたが必要としているみことばが目に見え込んできます。「ああ、これこそがイエス様が私に言いたいことなのだ」とわかります。その箇所を線を引くとよいでしょう。その線の横に年月日を記入しておくと、あなたは後で見たときに、イエス様の語られた言葉とその恵みに改めて驚き、必ず感謝することになります。

私がまだ若かった頃、あるご家庭を訪れました。その居間のピアノの上に一冊の聖書がありました。手に取って中を見てみると、色々な箇所に赤や緑の線が引かれていて、横には日付が書き込まれていま

した。私が思わず「これは誰の聖書ですか」と尋ねると、母親が「娘のエミーのよ」と答えてくれました。このエミーが、後に私の妻になったのです。「イエス様は、聖書という回線を通して私たちに語りかけてくださる唯一のお方だ」と信じて人生を歩む伴侶を、私は求めていたのです。

「聖書だって人間が書いたものに過ぎない」と、人々はよく言いますが、これは大変な間違いです。聖書は人間が書いたものではなく、神が人類に語られた大切な言葉の集大成であり、何よりも、今の瞬間にもあなたが抱えるどんな問題にも生きた解答を与えることができる、信じられないほどの力を持つものです。聞こうとする心さえあれば、聖書を通して直接イエス様の御声を聞くことができます。イエス様は今も聖書という回線を通して、私たち一人ひとりに語りかけてくださっているのです。

そして、もう一つお願いしたいことは、同じ道を

歩む人々、イエス様に従って生きたいと願う人々との語らいや交友を求めていただきたい、ということです。私は三十年以上もの間、若い人たちを相手に牧師をしてきました。お年寄りだけでなく、多くの若者たちも罪の赦しを求めて集い、イエス様の罪の赦し、罪からの解放を確信するようになります。また、主イエス様と語ることができるようになり、主が祈りに答えてくださったと証しするようになります。どうか、イエス様とのそのような体験を持つ人々との交わりを、ぜひ求めてください。それは大きな支えとなります。あなたは自分の身近に、「イエス様とともに天の御国への道を歩み通したい」と願う人々を、きつと見つけることができるに違いありません。そしてイエス様は、あなたのすぐ前に立たれて、この瞬間にも次のように語りかけておられるのです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

(マタイ 11・28)

イエス様は、私たちの罪を赦し、解放し、新しいのちを与え、生きがいと励ましを与えてくださいます。そして私たちには、イエス様以外に、私たちを罪の重荷から解放してくださるお方は、誰一人として与えられていないのです。

